

# てこな・ミュージック・ジャーナル

## 「コンサート」と 「リサイタル」

### 演奏会ご報告

1月13日行徳文化ホールI & Iでの青島広志さん指揮、東京フィルコンサートはチケット完売となりました。会場に詰め掛けた親子連れの方々は青島さんのお話と東京フィルの素晴らしい演奏で、本当に楽しいひと時を過ごされました。前半はメンデルスゾーン、後半はベートーヴェンの第5から第7番までの交響曲の第一楽章で、会場に来た子供たちには決して易しくはない曲目でしたが、本当に熱心に聴いてくださいました。

### 「コンサート」って何？

ところでいつも使っている言葉「コンサート」の意味をちょっと調べてみましょう。音楽辞典によると、ラテン語のコンチェルターレ、コンソルティウムが結びついて「コンサート」となったそうです。論争と集団という日本語にそれぞれ訳すことができるので、「コンサート」を直訳すると「論争集団」となるのですね。論争とは白熱する話し合いですから、「熱心に話しあう人々の集まり」すなわち「熱心に演奏する集団」ということになるのでしょうか。コンサートという語が使われたのは17世紀です。ルネッサンスの頃から、裕福な支配者層が娯楽を提供するために音楽会を催すようになり、屋敷の中にサロンはもちろん劇場まで作り、オーケストラを擁する貴族さえいました。モーツァルトがウィーン、マンハイム、パリと就職を目指して旅したのも、そのような宮廷楽団の一員となるためでした。

### 楽長は大変

宮廷楽団を率いる楽長は非常に多忙でした。例えばハイドンはハンガリーの大貴族エステルハージ公の楽長になるとオペラや交響曲を次々に披露して、音楽好きの公の要求を満たしていました。万来の賓客をもてなす音楽も作らなければなりません。オーストリアのマリア・テレジア妃のためには、その名を付けた交響曲を演奏して喜ばせたそうです。規模の大きな作品から、食卓の音楽、または夜のたとりに相応しい夜想曲など、機会音楽の種類は本当に多様でした。機会音楽はさまざまな日常を彩るための「演出」「背景」の役割を担うもので、演奏に耳を傾けてもらうことだけを期待するものではありません。

市川市文化振興財団 文化芸術専門員 小坂 裕子

### ヘンデルの活躍

ハイドンと同じように楽団長として活躍したのが、その半世紀前に生きて、バッハとともにバロックを代表する音楽家であるヘンデルです。ヘンデルが仕えたのはイギリス国王ジョージ一世で、もっとも有名な作品に「水上の音楽」があります。テムズ川に船を浮かべる舟遊び、その気分を盛り上げるために作られたもので、その他にも<戴冠式アンセム><王宮の花火の音楽>など、王族の大事な行事のために音楽をつくり続けました。このような世俗的な音楽ばかりでなく、宗教音楽も作曲しなければなりません。ハイドンと同時代のバッハが残した作品番号は1000を越え、複数楽章の曲も多いわけですから、その数は膨大なものとなりました。このように音楽家たちは主人の庇護を受ける限り、宗教、世俗の境界なく、求められる機会に応じたものを生み出さねばならなかったのです。

### 世界初のホールとオーケストラ

18世紀半ばにはオックスフォードに世界でもっとも古いと言われている音楽専門のホールが作られました。ちょうどその頃、最古のオーケストラの一つ、ライブツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団も編成されました。「熱心に論争する集団」という語源のコンサートが成功するかどうかは、指揮者の腕次第です。ゲヴァントハウス管弦楽団が世界有数のオーケストラとなったのは、メンデルスゾーンが常任指揮者になってレパートリーを増やしたからで、バッハのマイ受難曲の再演、ブラムスやシューマンなど同時代のオーケストラ作品初演などに情熱を傾けたからだということが知られています。

### コンサートとリサイタル

最後に演奏会を意味するもう一つの言葉「リサイタル」にも触れておきましょう。独唱会、あるいは独奏会と訳されるのがリサイタルですが、この言葉を初めて使ったのは、19世紀を代表する音楽家リストでした。市民社会が芸術的に成長し音楽ホールに聴衆が集まるようになると、技巧を誇示するピアノ演奏会がもてはやされるようになったのです。そこに登場したのがリストです。大きな手から繰り出される音楽は、他の誰とも比較できないほど技巧的で、人間業とは思えないほどの素晴らしいので居並ぶ人を熱狂させました。超絶技巧奏者を意味するヴィルトゥオーゾの代名詞のようなリストが使ってから、「コンサート」とともに「リサイタル」という言葉がさかんに用いられるようになったということです。